これが私の楽器です！

音楽家にとってなにより大切な楽器を大公開！
東京交響楽団のみなさんはどんな楽器をお使いなのでしょう？

川崎市フランチャイズオーケストラ
東京交響楽団の音のヒミツ
第22回

これぞイタリア！明るい音に一目惚れ名匠モラッシーのチェロに魅せられ続けています

©N. Ikegami

チェロ フォアシュピーラー
謝名元 民
Tami Janamoto

僕は沖縄生まれですが、父の転勤で小学校2年生のときに川崎に引っ越してきました。チェロを習い始めたのは3年生のとき。最初のレッスンの日に雪が降り、それが人生で初めて見た雪だったのでよく覚えています。

チェロは分数楽器から弾き始め、身体が大きくなると次のサイズの楽器に替えます。フルサイズの楽器になったのは中学2、3年生頃です。先生が選んだ楽器で、アンティーク風で黒っぽく、音色も暗め。それが僕の楽器の好みでもありました。

大学4年のある日、楽器屋から「イタリアのモラッシーという楽器があるから弾きに来ない？」と連絡がきました。モラッシーとは、現代イタリアを代表する弦楽器製作者ジオ・バッタ・モラッシー（1934～2018）です。その頃の僕はモラッシーの名を全く知らなかったのですが、弾いた途端に、これぞイタリアという明るい音色に衝撃を受け、完全に魅せられてしまいました。「暗めの音色が好き」という長年の僕の好みは一瞬にして崩されました。「一目惚れ」ならぬ「一音惚れ」です。

この楽器屋へは大学1年のときから用がなくてもよく通っていましたが、当時僕は楽器を探していたわけではありませんでした。でもオーナーは、この楽器は僕に合う、と思って声をかけたのでしょう。他の人に買われては困る！と大急ぎで親の了承をとり、すぐに楽器屋に連絡して購入しました。あれから約四半世紀弾き続けていますが、今もその音色に惚れたままです。僕、こうみえて一途なんですよ（笑）。楽器は「物」とは思わず「身体の一部」だとイメージして弾いています。年数が経つにつれ、楽器を「弾く」ではなく、身体の一部として響かせたい、楽器と一体化したいという思いがますます強くなっています。

東響には大学卒業後すぐに入団したので、すでに人生の約半分をこのオーケストラで演奏しています。たくさんの演奏会を経験しましたが、その中で特に印象に残っている指揮者はゲルギエフ氏です。爪楊枝の指揮で有名ですが、各プレイヤーに責任を持たせて自由に演奏させ、そして統率する。本当に魔術師のようで、東響の音が変わって驚きました。最近では7月に共演したヴィオッティ。リハーサルはしつこいながらも納得のいく内容で、本番も楽しく演奏できました。ノット監督は、楽団員自身に考えさせながら細かく音楽をつくっていくので、東響の方向性にぴったりだと思います。ノット監督のもと東響がどこまで進むか楽しみです。

左／f字孔の中をのぞくとラベルに1975年製と書いてあります。モラッシーの楽器は1970年代のものが特に良いと言われています。 右／焼き印も見えます。

裏板の木目の美しさは、謝名元さんもお気に入り。

楽器は愛しのパートナー。本番前と後にチュッと挨拶します。そのため、その箇所のニスがはげてしまいました！

ケースに入れたときに弓が楽器に当たらないよう、不要になったTシャツを着せています。これは、東響野球部のユニフォームの下に着ていたTシャツ。

弓は2本。上はオーケストラ用。下はモラッシーの楽器と一緒に購入したもので、室内楽のときに使用。最近は諸事情により、室内楽も上の弓で弾くことも。「弓は消耗品なので、あまりこだわっていません」。

ケースは銀色が好み。理由は「どんな色の服を着ても合うから」。このケースは今年のお正月に購入したばかりですが、以前のケースより大きいために自動改札などでぶつけてしまい、傷がたくさん……。

楽器を拭くものは手ぬぐいが一番。いのしし年生まれの謝名元さんは、某銀行からもらったいのしし柄の手ぬぐいを使用。

名匠モラッシーのチェロ。明るい色ですが、購入したときはさらに黄色かったそう。

楽器ケースに入れているもの。（左から時計回り）「鉛筆」。「爪切り」。以前は常に借りていましたが、その人が退団したので「困るだろう」と同じチェロ・パートの樋口泰世さんがプレゼントしてくれたもの。「テールガット（テールピースとエンドピンをつなぐコード）」。以前、演奏中に切れたことがあるので、万が一の応急処置用にプラスチック製のものを常備。「エンドピンストッパー」。「松脂」。ケースはベルナルデルですが、中身は楽器屋が作ったオリジナル。「弦」。楽器に出会ったときの明るい音色を変わらず奏でたいので、楽器屋お勧めのスピロコアを使い続けています。